

增長天王

吉川英治

青空文庫

山目付

こんな奥深いきようこく峽谷は、町から思うと寒い筈だが、案外冷たい風もなく、南みなみこうばい勾配よを選つて山歩きをしていると草萌くさもえごろ頃のむしむしとする地息に、毛の根が痒かゆくなる程な汗を覚える。

天てんめい明二年の春さきである。

木の芽めの色、玲瓏れいろうな空、もえる陽炎かげろう、まことに春らしい山村の春。

肥前鍋島家ひぜんなべしまけの役人、山目付やまめつけの鈴木奎之進すずきもくのしんという色の黒い侍、手に寒竹かんちくの杖つえをもち、日当たりのいい灌木かんぼくの傾斜を、ノ

ソリ、ガサリ、と歩いている。

「どうも、さっぱり面白くないな」

といわんばかりな顔つきで、かつこう恰好な場所を見つけると、ドツカリ山芝へ腰をおろしてしまった。

膝を抱えるともくのしん柰之進、ひなたしあん日向思案に落ちこんで、やまめつけ山目付とは、

何たる御苦労なしな役目だろうと、今さららしく、退屈の不平を数えた。

しかし、初めは城下詰ぞくやくの俗役をいとして、われから望んだ役目なのだ。が、さて、やってみると、毎日、さくらやま皿山からこの大おおか

川内わちの山一帯を、ガサリ、ノソリとあるいているだけの商売で、他国から御用ごよう窯かまどの秘法を盗みにくる奴やつもなければ、品物を密売

する悪人もない。みな佐賀のほこり、御用焼きの色鍋島いろなべしまを克こくめ明いに制作している、善良なる細工人さいくじんばかりの山だ。

同時に、山目付の十手じってや大小も飾り物かざりもの同様になつてあるくかがしに過ぎない訳にもなる。春の山に菌きのこを求めているような役を、七、八年もやっていると武士らしい誇りや張合いはおろか、自分
は人間だか兎うさぎであるかについて、ちよつと考えて見たくなる。

何か波瀾はらんがあればいい。

血の雨でも降るようなことが。

とまれ、余りにこの山は平和過ぎる。すぐ目の下の山間やまあいを眺め渡してみても、あつちの沢やこつちの山瀬に、四、五十戸の屋根が見えるが、それは皆、名陶めいとう色鍋島を焼く、御用細工人の陶す

器えもの小屋で、人間がいるとは思えぬほど、イヤに寂莫せきぼくとした景色である。

平和に飽あくと平和な光景が、見るも気けだるくなつてくるらしい。それが、奎もくのしん之進をいよいよ憂鬱ゆううつにさせて、何か、波瀾の来たらんことを祈りたくなる。

「それを思うと久米くめい一は偉いやつだ」

奎之進は、いつか久米一から聞いた怪気焰かいきえんを思いだして、いささか屈託くつたくを慰めようとした。

「いったわえ、いつか、あいつが。だめだだめだ若い奴らは、五年もこの山に棲すむとカサカサになつて寒巖かんがん枯骨ここつのていたらくだ、陶土つちに脂あぶらも艶気つやけもなくなつてくる。そんな野郎は茶人相手の柿かき右

衛門えもんの所へ行ツちまえ。おれの山から作りだす色鍋島は、煩惱ぼんのうも
 もあり血も通っている、人間相手の陶器を焼くんだ！ と。なる
 ほどそれは一理あるな。だが後の言葉はなお久米一らしかった。
 べらぼう棒め！ と、こいつは、あの仁じんの癖くせで、——西さいぎよう行ぎようとか芭ば
 蕉しようとかいう男みてえに、尾花おばなや蒲公英たんぽぽにばかり野糞のくそをしてフラ
 フラ生きているような人間になつて、ほんとの、生きた陶器が作
 れるか。陶器つてえな冷やつこい物ばかりじゃねえぞ、恋女房
 の肌みてえに、暖かいものの筈はずなんだ？ と。ははははは、無学
 の暴言かも知れないが、一家言いっかげんとして聞いてもいい、とにかく
 あいつは活いきいき々いきいきした人間らしいな、この柰な之の進しんに較べてみても」
 立つと思う心もなく、フイとひとりでに立ち上がった。急に、

くめいち 久米一の細工邸へ、出かけてみたくなつたのである。

そして、灌木の枝を掻きわけながら、ザワザワと低地へ下りて行きかけたが、何に眸を衝たれたのか、

「あ——」棒立ちに足をとめてしまった。

先の者も人の気配に、奎之進よりはびつくりした様子。雉子の雌雄が舞つたように、パラパラと沢の方へ逃げだした。

後ろ姿——どっちも美しい若人である。「罪なことをしたなあ」

彼は、何だか余りいい気持がしなかつた。これは退屈の憂鬱へ、少し刺戟があり過ぎる。だが、こんなこともこの山にあつた方が喜ばしいと思つた。

「旦那だんな、鈴木の旦那」

その時、誰か後ろから呼びかけた声を聞いた。ふり顧かえつてみると、久米一の細工邸かまたにいる窯焚ももすけきの百助という男。

「なんだ、お薪山まきやまか？ ——」

「いいえ、少し旦那のお耳に入れておきたいことがありましてね」
 ばかに生きまじめな顔をして、寄つてきた。

秘法盗

「今、あわてて逃げだした男女ふたりは、久米一の娘なつめの棗なつめさんと絵描座えかきざに仕事しごとをしている、兆ちやうじろう一郎という若造わかしよですぜ」

と窯焚かまたきの百助、いまいましそうに鼻をこすつた。

「ああ絵描座の兆二郎か、年は若いが、だいぶ仕事の筋はいいそ
うではないか」

「そりや絵筆も巧こうしや者でしょうが、女にかけてもするどい野郎で、
いつの間にか、師匠の娘とあの通り乳繰ちちくりあ合っているんです」

「まあいいではないか、いずれ久米一も娘の棗なつめに、婿むこをとらねば
ならぬ身だ」

「え！」百助は不服なつらをおさえつけて、「そいつをとやこ
ううわけじやありませんが、どうでもお上かみへ訴えなけりやならね
えことがあるんで、わっしは、そいつを旦那てがらの手柄にさせてえと
思ひましてね」

「訴える？ 何をだ」

「あの兆二郎という奴は、たしかに御用窯ごようがまの秘法を盗みに来ている廻まわし者ものですぜ」

「百助、まさか、いたずらごとを申すのではあるまいな」

「こんなことが嘘うそツ八ぱちでいえるものですか。あいつはまだ十六、

七の時、巡じゅん礼れいか何かに化ばけて、この山まきへ紛まぎれこんできた他国

者ななんで、巧うまく久米一の氣に入いって、絵描座の細工人なに成なり澄すま

したが、根からの巡礼にわかで、ああ俄にわかに腕にわかが上あがる筈はずはねえ、きつと

金沢くたにの九谷くたにかどこかの廻まわし者もので、色鍋島いろなべしまの錦にしき付つけや釉うわぐすり薬やく

の秘法を盗みに来たやつに相違あひだありません」

「しかし百助、それだけの理由では、兆二郎を御法度破ごはつとりと見な

すわけに参らんど」

「だから、これから師匠の家まで、恐れ入りますが一緒に来ておくんない。あいつとわっしが対決して、きつと生なまじろ白しろい仮面を引っぱいでお目にかけてみましょう」

「では何か、そちが兆二郎に泥をはかせるから、拙せつ者しゃに立会たつてくれというのか」

「親方の久米一にも聞いていて貰います。この山の鍋島焼きは、二百年来の秘密ひみつがま窯かまで、殿様初め佐賀城につぐ宝だとしているものだ。九谷くたにの者ものなぞに、窯築かまつきの法はや薬合くすりあせを盗ぬすまれて堪たまるものか。第一、そんな御法度ごはつと破やぶりを出せば親方も同罪だ、わっしや久米一のためにも、ウントここで肌はだを脱はがなきやなりません」

傲慢人

くろかみやま
黒髪山と谷川との間の狭い盆地に、
陶工久米一の細工邸が

あつた。

おおかわち
大川内四十軒の、
ねりつちかた
捻土方、
かまた
窯焚き、
しま
下働きなどの締りをし
ている
なべしまけごようこうにん
鍋島家御用工人、
どべいがこ
土堀囲いだが邸はかなり広い。

窯は盆地盆地に十数カ所、邸の裏山にも、一カ所ある。將軍家の
けんじょうひん
献上品や佐賀城のお道具だけを焼くお
とめがま
止窯だ。普通、諸
の
国へだすものは、今も久米一の邸の側の日向りに、まだ火も
そば ひあた
釉
すり
薬もかけぬ素泥の皿、
むこうづけ
向付、
こうろ
香炉、
なまぼ
観音像などが生干しに

なつて乾し並べてあるそれだ。

しかし、これとて、その釉薬、築窯、火法、みな厳秘洩らすまじきものとなつて、洩らしたものは磔の掟である。

「御免——」

立派な武士が久米一の邸を訪れていた。

佐賀の城下から来た鍋島家の奥用人、刈屋頼母という侍。通

されて奥へ入る。

奥では久米一、おそろしく華麗な部屋に、南蛮渡りの縞衣を着て、厚い衾の上に大胡坐をかいていた。

粉黛の粧い凝らした美女が、彼の瘤のように厚い肩の肉を揉んでいる。また一人の美女は久米一に煙草をつけて出し、また一

人の美女が茶を運ぶ、それら脂粉しふんの香かと絢爛けんらんな調度ちようどにとりま
かかっている陶工久米一は、左眼さがんのつぶれた目つかちで、かつ醜ぶおと
男こで、肥こえてはいるが、年、六十から七十の間。

憎にくらしいほど、豊かくしやく鑠やくとしたものだ。

また人にも実に憎らしがられている。山の者はいうまでもなく、
役人達まで、一人として彼を憎まざるものはない。久米一非常な
傲慢ごうまんだからだ。誰にも屈くつしたことがない、誰へも傲倨ごうきよに君臨
する、ましてや芸術においては無論、天下の陶器師を睥睨へいげいして
いる。

それでいて、城主を初め、役人や山の者までが、彼の前には、
膝くつを屈しなければならなかった。たしかに、久米一は名陶工であ

つたには相違ない。色鍋島の絢爛けんらん艶美えんびな彫琢ちようたくと若々しい光彩みなきの漲みなきつた名品が、この老いほうけた久米一の指から生れて、他の若い細工人さいくじんの手からは作り得なかつた。

京の仁清にんせい、色絵いろえの柿右衛門かきえもん、みな一派の特長がある。この山

からだす色鍋島は、こう行くよりほかに道はないぞ、と彼はよく

弟子の枯淡こたんになるのを叱りつける。

たいしゆひぜんのかみ
うしやう 太守肥前守の使者、奥用人かりやたのもの刈屋頼母は、この尊傲そんごうな工

匠うしやうの部屋へ通つた。

「おいでなさい」

といっただけで、久米一、別に上座じやうざも与えず、ただ肉の厚い膝を、いやいや直しただけである。

「相変らずお達者で祝しゆうちやく着やく」

かえつて、城主の使者が世辞せじをいう。

「達者でござるよ。だが、もつと若くなるつもりだ」

「先日、殿からお贈り申し上げた朝鮮ちようせん人參にんじん、どうでござりま

す。召しあがりしましたか」

「うむ、やってみたよ、あいつはきくなあ」

「そのうちにまた、厦門アモイせん船が入りましたら、お届け申すように

取りはからいましょう」

「せいぜい、久米一のために、不老長寿の食い物を探してくんなさい。何しろ山にはロクな物はねえからの。おれが老おい込こむと、

色鍋島は亡ほろびるぜ、つまりは、そつちの損にもなる」

「分つておりまする」使者の頼母たのもは、さつきからムカムカしている我慢がまんが、フツと顔にに苦にく出たので俯向うつむいたが、ぴったり、胸を張つて改まつた。

「時に久米一殿」

「なんだな、殿様のお言伝ことづてか」

「左様。そのため俄にわかに参じた次第。ほかではないが、折入つてのお頼み、一世一代のお氣組きぐみで、御用登りごようのぼの窯かまにかかつては下さるまいか」

「はてな。御用窯にかかるとは、三年に一度の掟おきて、去年、三彩獅さんさい子しと牡丹ぼたん絵えの瑠璃花瓶るりかびんを焼き上げて將軍家と御城内へ一つずつやつてある筈はずだが」

「さ、それについてでござる」

「氣に入らねえのか」

めっそう

「滅相もないこと、三彩獅子を御覽ごころうぜられて、將軍家の御感ぎよかん

ひととお

一通りでなく、殿、御上府のせつは、偉い面目めんもくをほどこした

そうでござる」

「なアにお前、將軍家なんぞに、この久米一の仕事たまが分つて堪るものか。ばかな、そりや大名の頭なを撫なでそやしておく、お世辞せじというものだ」

「いえ、決して世辞ではござりませぬで、御賞美の余り、もう一つ、黒木くろぎの御書院ごしよいんへ置く陶器をという御懇望、ほかならぬお方のおねだり、いやとは殿も仰せ兼ねます。久米一殿、頼母たのもがかく

の如く両手をついてお願い申す、お家のためと思うて一つおかかり願いたい」

「ははあ、分った」

「えっ……?」

「そりや將軍家へ行くんじやあるまい。この久米一もそろそろ歳だ。いつぼけるか分らないから、このへんで、一生一品な物を作らしておこうという考えだろう」

「いや、まったく、左様なわけではござらぬ」

「隠しなさんな。よし、よし、おれも随分鍋島家には世話をやかせた、おれの傲慢ごうまんに腹を立て、切腹した家来まであるからな。それにいくら久米一だつて、そうそう若さも続くまい、一つ

これを最後に何かやって見よう」

「えつ、御承諾ごしょうだく下さいまするか……」豊を下がつて礼をのべた。

あたかも主君へ対する作法である。その上、夥おびただしい金布きんぷの贈おくりも物を残して、刈屋頼母かりやたのも、大川内おおかわちの峽たにあいから駕かごを戻して行つた。

「さあ、女ども、足を揉もめ、足を」

久米一はすぐにゴロリとなつて、前の若い女達を呼んだ。その女達は、伊万里赤絵町いまりあかえまちから、かわるがわる四、五人ずつ呼んでおく港の遊女で、朱塗しゆぬりの駕かごが山峽やまあいを通る日は、飽あいた女が返えらされて、次ぎのみめよい女が撰えらばれてくる日だ。

× × ×

かまた 窯焚かまたきの百助ももすけと山目付やまめつけの鈴木奎之進もくのしん、庭木戸から入つて

きてこの態を眺めたが、格別目新しいことでもないので、相変らずだな、と思つて縁へ寄つてきた。

「親方、ちよつと起きておくんなさい。窯焚きの百助です」

「寝てやしねえ。なんだ？」と、久米一は横になつてゐる体を腹這いにして、擡げた首へ頬杖をついた。百助は癩に障つて、

「この老爺め、よくよく芸に慢心していやがる」

と思つた。陶器作りで一番大切なのは窯焚きなのだ、窯焚きの手加減一つで、どんな名工の鏤心碎骨も、ピンと破れが入つてしまう。

だから、どんな雑物焼きでも、窯焚きの待遇にはハラハラするのが世間一般、久米一のように、腹ン這いで話すなんていう

不作法は見たくも見られぬ例外だ。

「折入って、親方にちつと話があるんですがね」

「いってみねえな。よく今日は、折入ってという奴が続く日だ」

「鈴木 of 旦那」と後ろを向いて、

「一つわつしに代って、さっきのいちらつ一つ罎を親方に打ちまけて見て

おくんなさい」

「よろしい」と山目付のもくのしん奎之進、久米一の氣に障さわらぬように兆ち

ようじろうようじろうけんぎの嫌疑を話した。

恋燐火

絵描座えかきざと呼ぶのは、陶器絵かきの細工部屋さいくべや、奥の静かな一間ひとまである。

さつき、そこへ戻った菊田兆二郎は、何食わぬ風を装よそおって、香こ炉ろうか何かこいえに鯉絵さいかんの彩管なつめをとっていた。

と、そこへ久米一の娘なつめの棗なつめが、少し色をかえて入ってきた。

「兆二さん」

「また来たのですか」

「嫌いやなの？」

「そうじゃありませんけれど、師匠の眼につきますからね」

「お父さんはいいのだよ。だけれど、困ったことが出来たようだ……あの窯焚かまたきの百助ももすけと鈴木さんが来て、何だかお前に来てく

れというのだけれど」

「どこへです？」

「お父さんの部屋に。鈴木さんはいい方だけれど、あの百助のやつ、ほんとに嫌な奴だから、何をいいだすか知れないよ」

「いったら私もいつてやります。いつかお薪山へ、お嬢様を誘い込もうとしたことを」

「面の皮をむいてやった方がいい。だがね兆二や、向うで黙つていたら止した方がいいよ」

「ええそりやいやしませんとも」こんな気持で、兆二郎は何気なく、縁伝いに師匠の部屋の前に来て板敷の上へ畏まつた。

まだ前髪をとったばかり、青々とした月代に、髪油の

うつりがいい。小刀を前差にして、袴はかまの襷ひだをとった形、いかにも
 棗なつめの眼をひいたろうと思われる。

窯焚きの百助は、虫酸むしぎすの走るような眼をくれて、いきなり側そばへ
 寄って行つた。

「おい！ 加賀ツぽう！ 加賀の九谷くたにから来た兆二郎ツ」

「えつ」

「見やがれ、面つらの色いろが変りやがった。汝うぬはなんだろう、大聖寺
 の前田の家来か九谷すえものの陶器つく作りの俵せがれだろう。うまく化ばけ澄すまして
 いやがるな」

「飛んでもないことを！ ……百助さんわたし私は元江戸の者で、兄は
 浮世絵師の」

「止せよ！ この窯焚きの百助はな、さんざん江戸でもゴロついていた事があるんだ。てめえみてえな色の生なましろ白い泥人形が、江戸生れだなんて吐ぬかしたって誰がまともに受けるものか。その訛なまりは加賀ッぽう剥むきだした。前田の家来に違ちがえねえッ」

「無む態たいなことをおつしやつて下さいますな。この兆二郎の身の上は、師匠もよく御存じでございます」

「やかましいッ。巡礼だか六部ろくぶだかになりやがって、仮病けびょうをつかってこの邸やしきの前に倒れたなあうぬの手段だ。そんなことはこの百助が、三年も前から睨にらみ貫とおしているんだぞ。さ、ここで泥を吐かなけりや、俺おれと一緒に代官所へ来い。白洲しろすで、白黒をつけてやる」

ムズと兆二郎の襟えりくび頸つかを掴んだ。

ずるずるツと廊下を引摺ひきずつて行こうとする。もの蔭かげにみっていた棗なつめは唇の色を失ふるつて顫ふるえていた。

すると、煙管きせるを咥くわえて、今まで默然もくねんとしていた久米一が不意ふいに起たつて、百助の腰をドンと蹴飛ばした。

「あつ」と、庭先へ打ぶつ倒たおれた窯焚かまたきの百助。何か叫なぼうとしたけれども、ぬツくと、縁先に突つ立たつた久米一の形ぎよう相そうをみると、思わず骨身ほんみが竦すくんでしまった。

鈴木奎之進もくのしんも、その血相けつそうには気をのまれた。よく山の者が久米一の傲慢ごうまん増長ぞうちようを憎にくんで、かげ口に増長ぞうちよう天王てんのうと悪口じょうぐちをいっているが、かりそめにも、この大川内で窯焚かまたきの上じょう手ずで

は右へ出る者のない百助を、足蹴あしげにした憤怒慢心ふんぬまんしんの今の姿は、
まったく、増長天王そのものの相であると思つた。

「た、短気なことをなされるな」

と李之進もくのしん、とにかく割つて入つたが、百助ももすけは嚇かツとなつて、

久米一の顔を睨み上げた。

「やい、な、なんで俺おれを足蹴にしたツ」

「毒蛇といつてあきたらねえ人非人にんぴにん、足蹴ぐらいは易やすいこつた
わ」

「人非人にんぴにんだと？ おい久米一、汝うぬはどれほどな名人だか知らね

えが、余り慢心して気まで変にならねえがいい。御法度ごはつとを破つて、

秘法を盗みに、他国から住み込んでゐる廻し者を、俺が見破つて

やるのは、取りも直さず汝うぬの落度おちどを防いでやることになるんだ。

恩とは思わねえで、人を蹴飛ばす法があるかッ」

「やかましいわいッ」

はつたと睨んで、久米一、そこに人なきごと如くこう言った。

「おれの持つわざというものはな、自体こんな狭い山だけに、秘し隠しにされておしまいになるような小さな物ではないのだぞ。

芸わざの術が大きいければ大きいほど、世にも響あふこう世間にも溢れ出よ

う。それが当然なりゆの成行きだわえ！ だが兆二郎が加賀の廻し者だ

とは汝おのれだけの悪推量わるずいりよう、娘の棗けそうに懸想して、それが成らぬと

ころから卑怯ひきような作りごとをして、仇あだをしよう腹だろうが！ ば

！ ばか者奴ッ」

「うーむ……」と百助、菌を食いしばって無念がったが、それは彼の毒心どくしんに、グサと入ったヒ首あいくちの言葉である。こめかみから額みみずに、蚯蚓みみずのような青筋をみなぎらし、

「ちツ……畜生おぼツ、覚えていろ増長ぞうちょうてんのう天王め！」

「なんだと」

「う、うぬの陶器すえものは、今日ツかぎりこの百助が手てにかけねえからそう思えツ」

「勝手にさらせ」

「才才久米一、手を切ツたぞ！」

眼りんかに燐火りんかを燃えたたせて、真ツ蒼さおに怒こった窯焚かまたきの百助、捨さてぜりふを残してまツしぐらに馳かけだして行いった。

ろくろ情

たにあい
 峡谷の山村に、春が過ぎ夏が過ぎ、山そのものが色いろえにしき絵錦の陶す器えもののような秋になった。

近ちかごろ陶工久米一とうこうくめいちの生活は、がらりと打って変つてしまった。
 なんびとのぞ
 何人も覗かせぬ、細工場の陶戸さいくば すえどを閉めきつて、一生一品の製作しょうじんに精進しんしているのだ。

彼が、これを最後として作りにかかつているのは、窯焚かまたきの百も助もすけが、自分ののしを罵った言葉に着想を得た、増長ぞうちょうてんのう天王二尺余よの像である。

久米一は元より柿右衛門の神経質な作を嫌い、古伊万里の老成ぶつたのはなおとらなかつた。で、この増長天王にあらん限りの華麗と熱と、若々しさと矜と、自分の精血を注ごうとする意気をもつた。

深沈しんちんたる真夜中。

陶戸すえどの中の久米一は、素地そじを寄せて一心不乱へらに篋へらをとつた。ミリ、ミリ、彼の骨が鳴つて、篋へらの先から血したたが滴りはしまいかと思われる。

轆轤ろくろにかかる彼の姿は、鬼のように壁へ映つた。そして、夜をつみ、日をついで、釉葉染ゆうやくそめつけ付の順に仕事が進んだ。

ところが、人の寝しずまる頃になると、久米一は、物の怪ものけに憑つ

かれたように、仕事のひとりごとを洩らすのであった。

篋へらの秘伝、釉薬くすりの合せ、彼が今日までおくびにも出さない秘密を、みなブツブツとひとりごととに説き明しあか、そして増長ぞうちょう天王てんのうの仕上げにかかっていた。

不思議な——？　と思うと、またここに怪しいのは娘なつめの棗なつめの部屋。

夜ごと、一人の男が忍んでくる。

それが絵描座えかきざの兆ちよう一郎じろうであることはいうまでもないが、その部屋へ入るとやがて、兆二郎の姿はどこかへ消えてしまう。そして、戸棚の上の天井板てんじょういたが黒い口を開くのである。

夜ごと、天井へはい上がった兆二郎は、屋根裏を伝うと、ソツ

と久米一の密室の上へかかり、そこに、苦心をして僅かに覗のぞきうるだけの穴をあけた。

棗なつめはその間あいだ、ほかの弟子が来ぬように見張っていた。兆二郎は天井の穴に目をつけて、息をのみながら久米一の仕事を凝ぎよう視する。

と——やがての夜から久米一のひとりごとがはじまったのである。見ただけではわからぬわざの謎なぞ、そこへくると説とくのである。ああ、師匠は何もかも知っているのだ……色絵の秘法と同時に娘なつめの棗をもゆるしてくれる心であったと兆二郎が、真つ黒な屋根裏で両手を合せたことも幾いくたびか。

輪廻篇

窯焚かまたきの百助ももすけは、無論あのまま黙つてはいない。なお、執しゅう
 念ねん深く、兆二郎ちようじろうの疑点をいくつも探り、佐賀の城下へ出て密
 告した。

ところが、鍋島家なべしまけの役筋の方では、訴えられて非常に弱つた。
 殊つとに、刈屋頼母かりやたのもは極力それを揉み消し、百助と久米一との和解に
 努めた。

久米一の細工さいくやしき邸ひほうから、秘法盗みの罪人を出せば、その師匠の
 彼をも、同罪にしなければならぬ困難が一つ。

また、百助をここで怒らせてしまつては、無論久米一の御用ごようが

窯まには火を入れないと頑張るに違いない。ところが、久米一ほどの名人の火入れひいする窯焚かまたきはそうザラにあるものでなく、大川内わち、伊万里いまり、有田ありた、三池さんちを通じてみても、今度の献上けんじようすえ陶器のの火入れは、どうしても百助でなければ納まりおさがつかない。

この困難が一つ。

そのいづれを欠いても、こんどの大事な製作ができないわけ、頼母たのもが狼狽ろうばいしたのは無理ではなかった。

しかし、百助の方は、すべて莫大な金づくで我慢させた。

いやいやながら久米一に詫わびを入れその日に、いよいよ焼くとなつた増長ぞうちようてん天王のうの像をうけ取つた。みると、さすがに倫りんを絶ぜつしたでき栄ばえである。いかなる遺恨いこんも、憤怒ふんぬも、久米一の芸術の前

には、自ら頭を下げずにいられなかつた。

その受け渡しがすむと。

もう代官所の方では、すっかり手配ができていた。

「それっ」とばかり、久米一の細工邸へ、捕手の者を乱入させ
た。

何の苦もなく、久米一は直ちに縄を打たれてひきだされてきた。
だが、その姿を一目見た役人や山の者は、一瞬に平常の彼にもつ
ていた憎念を忘れて涙ぐんだ。

一心の芸術は、こうも人の精血を吸つてしまうものだろうか。
僅かな間に、久米一の痩せ衰えたことは非常なものであつた。糸
を抜かれた蛾よりも婆娑とした姿に變つて、大言壮語も吐かず弱

わよわ
々と佐賀の城下へ曳ひかれて行つた。

しかし、久米一より大事な罪人、絵描座えかきざの兆二郎と、娘なつめの棗の姿は、捕手が入つた時すでに、影も形も見えなくなつていた。無論、逃げたのは山越えとみて、山目付鈴木奎之進やまめつけ もくのしんが手配したが、遂に、網あみの目にかからない。

夕月のかかる前から、黒髪山くろかみやまの山ふところ、御用窯ごようがまに火が入つた、まつ黒な煙か、峡谷から押し揚つた。

そこに働いているのは窯焚かまたきの百助ももすけ。

彼は溜りゆういん飲いんをさげて、得意みに盈みちていた。

「ざまア見やがれ！」

ひとりで凱歌を奏していた。

しかし、彼の鬱憤うつげんは、久米一の細工屋敷が没落し、彼が城下で磔はりつけになるのをみても、まだまだ腹が癒いえなかつた。彼奴かやつが死んでも殺されても、まだ生きているもののあるのを知っている。

何かといえ、久米一のわぎの魂。彼が色鍋島いろなべしまに残したかがやかしい名声だ。

「ようし……畜生」

百助は、その無形な名声をも殺す、恐ろしい一策を思いついた。今、この御用窯の中には炎々たる高熱の火が入っている。そこには、久米一が、一世一代の製作、増長ぞうちょうてんのう天王が彼奴いのちの命を吹ッ込まれて、世に生れ出ようとする火炉かろの胎養たいようをうけているのだ。

「こいつを、満足に火からだすのも、暗やみから暗やみにしてしまうのも、窯焚かまたきのおれの火加減一つじゃねえか！ ウム！」と彼は思いついた悪智にうなずいて魔の笑いをもらした。

こうなると、百助の冴さえた腕は、恐ろしい悪事の構成に利用される。彼は窯かまの中の陶器すえものを、巧みに、火加減をもつて悪作あくさくなものに変質させようとするのである。それも通常一般的な窯焚かまたきが窯主かまぬしに仇あだするような拙つたない手法でなく、後に誰が見ても、その製作が久米一の手落ちなためで、火入れの故意せいではないように見せるべく苦心をした。

で、彼は、わざと変則な火入れをした。

夜に入り夜が更ふけると共に、太い火柱の影が、月の空へ突きと

おつて見えた。そしてすでに五更ごごうの暁に近いころ……。

今が大事な火加減のところである。

厚きずく築きずいた窯かまの土が、人間の血を日に透すかして見るように赤く

見えてきた。ここに窯焚かまたきの懸命けんめいが入れば、陶器とうきの増長ぞうちようてん天王、

焰ほのおの中から命いのちをもつて、世に出たもうことになるのだろうが、百

助は、元よりそれを呪のろっている。仇あだの胎児たがいの死を眺めるような気

持で冷然と、薪束まきたばの上に腰を下ろし、スパスパ煙草をくゆらし

始めた。

たちまち窯かまの肌かわがドス黒く、火口かこうの焰も弱よわつて真まつ暗くらになつて

きた。久米くみ一生涯いっせいかいの神品しんぴんも、今はどうなつたか計はかられない。百

助はそれを眺めてニタツ……と嘲笑あざわらつた。

その時、不意に百助の後ろへ、黒い人影がソツと立った。

「おや？」

と、感づいて、ふり顧つた彼の真つ向！

颯然と、螢を砕いたような光が飛んだ。あツといった時は、

それが剣であつたとみる眼も眩んで、窯焚きの百助、額を抑えて、ダツ——と跳びのき、満面朱になつて、

「うウ！ ……だ、誰だツ」

唇に流れこむ血を吹いて喚いた。

青白い剣の尖は、それに何の答えも与えず、なおスルスルと追いつめてきた。百助は必死になつて、よろよると逃げ廻つたが、

また一人、飛鳥のごとく駈け寄つた影が、抱きすくめた彼の脇腹

へグザと短剣の切ツ尖をえぐつた。

「おお、火が消える」

相手が斃れたと思うと、それには眼もくれないで、二人の影がかいがいしく窯の前に働きだした。

お薪山から伐りだした松薪の山を崩して、それを掴むと、火口を屹と覗いた若者。

「ええツ」

気合をかけてポーンと投げ込んだ。

「ええツ」とまたすぐに次の一本、また一本。今にも絶えなんとしていた火の命！ 甦つたかの如く赫々と燃え上がってあたりは光明昼のごとく真つ赤に照つた。

百助ももすけを斃たおして、一心不乱かまたに窯焚ききをしている若者二人の影、

その時、ありありと姿が読まれた。

絵描座えかきざの兆ちようじろう二郎と、久米一の娘なつめ、棗なつめであつた。

絵師兆二郎は元よりただの細工人さいくにんではない。加賀大聖寺かがだいしようじの

武人の血をうけ父は九谷陶くたにすえの窯元かまもとである。多少の呼吸も心得

ている上に、今は恩人最後の大業を、命にかけても焼き上げよう

とする一念があつた。焦熱しやうねつの懸命けんめいがあつた。

窯かまは音をたてて最高度まで焰をあげ夜はほのぼのと明けかけて

来た。紅蓮地獄ぐれんじごくにふさわしい漆紅葉うるしもみじの真つ赤なのが、峰から降

り、窯かまの火ひツけ気けに煽あおられて、翻ほん々と空に舞い迷う。

やがて海嘯つなみのような声あがが揚あつた。

山峡の細道を伝つて、おびただ夥しい捕手の数とりてが黒髪山くろかみやまへ乱れ入つた。が、捕手の目は、御用窯ごようがまの前に落葉うがずに埋もれた百助の死骸を見出したのみで、なつめ棗の姿も兆二郎のかけも、遂にひねもすの山狩むなしく見る事ができなかつた。

ただ、二人をあきらかに見送つていた者は。

やまめつけ山目付の鈴木 奎之進もくのしん。

峰いただきの頂、伊井諾いぎなぎの尊みことの髪塚かみづかに立つて、程近き間道かんどうを手に手

をとつて、くにざかい国境へ逃げてゆくふたりの姿を認めたのである。

が、——しかし、もくのしん奎之進、その時、その若人たちの前途に、

明るき春あれ幸さちあれと、祈る心は湧いても、無慈悲むじひな飛繩ひじょうを飛ばそうとは、つゆ露ほども思わなかつたのである。

久米一くめいちがいった。いつか窯焚かまたきの百助ももすけを蹴落けおとした時に、「おれのわざはこんな山の中に封じられて終るような小さなものではないと。偉大なものは世の中へ溢あふれ出すにはいない」と。そうだ、ましてや奎之進の持つ弄具おもちゃ同様な十手とりなわや捕縄とりのなわで、その溢あふれる力がせき切れるものか！ ……

しかし彼の心が、再びこの山村の平和に退屈しても、なお、これ以上の波瀾はらんを欲するかしら？ それは奎之進にも分らない。ただ当座は、一刻も早く陶器山すえものやまの静まるのを念じたに違いない。

× × ×

佐賀の城下で、陶工久米一とうこうくめいちが断罪となる日、彼の持窯もちがま——
黒髪山くろかみやまの御用窯ごようがまも破壊された。破壊された中から生れた物があ

つた。それはたいしゆ太守も、刈屋かりや頼母も、まかりつたく望みを絶きつていた、

ぞうちようてんのう増長天王の陶器像すえものぞう。しかも一点の瑕きずなく彫琢ちようたくの巧緻染こうちそ

めつけ付の豪華ごうか絢麗けんれいなこと、大川内おおかわちの山、開ひらいてこの方かた、かつて

見みない色鍋島いろなべしまの神品しんひん。さらに、焼きの上うへがりも無類むるいであつた。

なべしまひぜんのかみ鍋島肥前守なべしまひぜんのかみは、山役人やまやくにんから、その欣よろこばしい報しらせをうける

と、直ただちに、久米一助じよめい助命じよめいの急使きよめいを走はらせた。

急使きよめいは刑場けいじやうへ間に合あつてついた。

だが、久米一助くまいいつしよの助命じよめいはかいけないことであつた。なぜなぜといえ、

彼は、刑場けいじやうへ来る途中ちゆうちゆう、すすでに、刀やいばも待まちたず、枯木かれきの折おれるよう

に、死しぬともみえず老衰らうすいで死しんでいた。

さて——話わの結むすびに、彼かれの残のこした増長天王ぞうちようてんのうはどこへ安置あんじさ

れたか、それを一言する。

天明^{てんめい}四年正月早々。佐賀城から江戸へ向つて、警固荷役に守られて送り出されたのが、久米一作の増長天王であつた。届け先は、頼母が久米一に話した言葉と違つて、千代田の城へは入らずに、時の権勢家^{けんせい}、田沼山城守意知^{たぬまやましろのかみおぎとも}の屋敷へ贈物とされることになつた。

これは鍋島家が、山城守に睨まれていたことがあつて、その機嫌をとり結ぶべく、心を砕いた賄賂^{くだわいろ}であつた。賄賂といつては、久米一が作らぬだろうと、頼母^{たのも}に旨^{むね}を含ませたのである。

ところが、増長天王を田沼山城の屋敷へ贈る手続きをしている間に、三月、江戸城朝会^{ちやうかい}の当日、山城守は悪政の酬い^{むく}をうけ、

殿中で刺殺しざつされてしまった。

そのため、増長天王はしばらく江戸の上屋敷の秘庫ひこにあったが、後に將軍家いえなり齊せいに懇望こんもうされて、江戸城本丸に移された。しかし、それもやがてまた、幕府瓦解がかいの兆ちようをあらわした、安政六年の失火の時、本丸炎上の紅蓮ぐれんをあびて、遂に永遠の相そうを失い、もとの土に返ってしまった。

青空文庫情報

底本：「治郎吉格子 名作短編集（一）」吉川英治歴史時代文庫、
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2003（平成15）年4月25日第8刷発行

初出：「サンデー毎日 春季特別号」

1927（昭和2）年4月1日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

増長天王

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>